

TOKYO 人権

●インタビュー／秋山正子

高齢者やがん患者が
「自分らしく生きる」ことを
支える場所をつくる

「暮らしの保健室」と「マギーズ東京」

●特集

3つの事例で学ぶ、人権と映画

●コラム

優れたドキュメンタリー映画を観る会
一本の映画と出会う

高齢者やがん患者が 「自分らしく生きる」ことを 支える場所をつくる

「暮らしの保健室」と「マギーズ東京」

あき やま まさ こ
秋山 正子さん

認定NPO法人マギーズ東京
共同代表理事
(株)ケアーズ・白十字訪問看護ステーション
代表取締役

新宿区にある都営戸山ハイツは約3,400世帯、6,000人が暮らす大規模団地です。団地内の高齢化率は50%を超え、うち4割以上が一人暮らし世帯とされています。その戸山ハイツに、2011年「暮らしの保健室」を開設したのが、20年以上にわたり訪問看護に力を注いできた秋山正子さんです。2016年にはがん患者と家族のための「マギーズ東京」を設立するなど、さまざまな課題に向き合ってきた秋山さんにお話をうかがいました。

—訪問看護という仕事を選んだ理由と、 訪問看護のニーズについてお聞かせください。

私が16歳のとき、がんだった私の父は自宅を息を引き取りました。私が看護の道を選んだのは「父に何もできなかった」との思いがあったからです。

1970年代、日本は第二次ベビーブームの時代でしたから、私は助産師の資格も取得し、人が生まれる現場で臨床経験を積みました。その後、看護学校で教員をしていた1989年、今度は2つ上の姉が41歳でがんと診断されたのです。しかも、進行が早いがんで、医師から告げられた余命は1か月。そのときに私が考えたことは、いかに症状を緩和しながら家で過ごすかということでした。当時は、在宅医療や在宅ケアの仕組みが整っておらず、末期がんの姉を家に連れて帰るのは無謀に近いことでした。しかし、実際に家に連れて帰ったところ、1か月と言われた寿命が5か月近くも延びたのです。そんな姉の姿を通して、私は、末期が

んであっても暮らし慣れた環境に身を置き、家族や親しい人と一緒に時間を過ごすことが、どれほど大切なことかを実感しました。また、同様の状況に直面している人が、他にもたくさんいるに違いないと思い、病院で患者さんを待つ看護師ではなく、患者さんの生活の場に出向く看護師になろうと思ったのです。

—訪問看護と病院で行う看護の違いとは？ また、近年における在宅ケアの傾向とは？

看護師のフィールドである病院に、患者さんが来るのが病院での看護です。看護師にとっては自分のホームグラウンドで看護をするわけですから、患者さんにとっては「アウェー」な状況になります。一方、私たち看護師が患者さんのホームグラウンドである自宅を訪ね、許可を得た上で中に入れてもらうのが訪問看護です。訪問看護では、患者さんの日常や流儀を尊重しながらの個別ケアになりますから、あくまでもオーダーメイドの看護といえます。



基本的な医療行為（バイタルサインのチェック、注射、傷の処置など）は、病院でも在宅でも同様なのですが、訪問看護では患者さんの家にあるものを使わせていただくこともあるし、部屋が狭かったり、散らかっていることもあります。つまり、どんな環境であっても、その環境の中で、その患者さんを主体としたケアを組み立てていく点が大きな違いといえるでしょう。また、訪問看護のほうが、患者さんは多少わがままであることを含めて、圧倒的に「自分らしく」いられます。

そもそも1950年代までは、ほとんどの人が自宅で看取られていましたが、徐々に病院死が増え、2000年ごろには病院死が8割、在宅死が2割を切るようになりました。それと同時に「病院で最期を迎えることは本当にいいことなのか?」「最期まで自分らしくいられる環境で過ごすほうがいいのではないか?」という議論がされるようになったのです。

—どのような理由から「暮らしの保健室」を開設したのですか。

末期がんの姉を家に連れ帰った際、訪問看護の制度がない中で、私たちの家まで来てくださっていたのが、当時、新宿区市ヶ谷本村町にあった白十字診療所の医師と看護師の皆さんでした。姉を看取った後、訪問看護ステーション制度^{※1}ができた1992年から、私はそこに籍を置き、訪問看護の仕事をするようになったのです。新宿区内には、1970年代にできたマンモス団地、都営戸山ハイツアパート（以下、戸山ハイツ）があり、そこには訪問看護を必要とする高齢者がたくさんいらっしゃいました。そんな中、諸事情により、白十字診療所が閉鎖されることになったのです。でも、私としてはそれまでと同じように、同じ地域で訪問看護を続けたいと思い、2001年に会社を設立し、ケアーズ白十字訪問看護ステーションとして、活動を継承しました。

訪問看護は、医療ニーズのある人が利用対象ですから、さまざまな病において症状が重めの人が多いわけです。そういう皆さんと接する中で、私は「もう少し手前から関わることでできていたら、もっと穏やかな経過をたどれたのに」と思うことが幾度となくありました。それで、病状や年齢に関係なく、誰でも気軽に立ち寄れて、病気のことや生活の困りごとを相談できるような場所をつくりたいと思うようになり、その思いをシンポジウムなどでお話ししました。そんな中、

私の思いに賛同くださった方が、戸山ハイツがある団地内の空き店舗を安く貸すと言ってくださり、2011年7月、そこを「暮らしの保健室」という名前でオープンさせたのです。

—開設から今日までの歩みと、現在の運営状況についてお聞かせください。

戸山ハイツの高齢化率と独居率は、いずれも5割前後と高く、地域の特性ともいえるでしょう。そんな場所にできた「暮らしの保健室」のニーズは、オープン当初から非常に高いものでした。機能を一言で言えば医療相談に限らず、暮らしの中での困りごとなど、さまざまな相談ができる場所、ということになりますが、現在、その役割はさらに多岐にわたります。①生活や健康に関する相談窓口。利用無料で予約不要です。相談内容に応じて、専門職（看護師、薬剤師、栄養士、カウンセラー）が対応しています。相談件数は年間で800件に上ります。②なじみの顔と過ごせる居場所。孤立化を予防するために、アクティビティやおしゃべり、食事会などを開いています。③世代間交流の場。大学生ボランティアを巻き込むことで、高齢者と若い世代の間に会話が生まれ、つながりが生まれます。④地域ボランティアの育成の場。現在、住民ボランティアは約30人。1日2～5人体制になるようシフトを組んで対応しています。中には利用者からボランティアになる方もいらっしゃいます。⑤医療や介護、福祉の連携の場。在宅医、病棟医、歯科医師、薬剤師、訪問看護師、病棟看護師、弁護士、高齢者福祉課の職員、地域包括支援センターの職員など、多様な分野からのプロフェッショナルが連携し、課題解決に臨んでいます。⑥在宅医療や病气予防の学びの場。市民公開講座や専門職向けの勉強会などを開催しています。

戸山ハイツと同じ特性を持つ地域は、全国各地にあり、「暮らしの保健室」の取り組みを参考にしようと、これまでに多くの方々が見学にいらしています。その結果、「暮らしの保健室」と同様の機能を持った場所が、現在、全国に50か所以上あり、これは今後も増えていくものと思われます。

—一方で、2016年には江東区豊洲にがん患者のための「マギーズ東京」をオープンさせましたね。

イギリス発祥の「マギーズセンター」^{※2}は、がん患者とその家族、あるいは友人などが気軽に訪れ、ゆっ

※1 1992年に老人保健法に基づき、訪問看護ステーションという制度ができました。これにより、医療法人のみならず、公益法人格をもつ社団・財団法人、社会福祉法人、NPO法人などが、在宅ケアを提供する訪問看護事業に携わることが可能になり、初年度に全国で200か所を超える事業所が開設されました。当初は、自宅で寝たきり状態の高齢者が対象でしたが、1994年からは利用対象が一般患者にも拡大され、2000年の介護保険施行により営利法人にも拡大し、現在、訪問看護事業所数は全国で1万か所にまで増えています。

くりお茶を飲みながら安心して話ができる、とても居心地のよい場所です。2008年に、この存在を知ったとき、私は「これは日本にも必要だ」と思い、イギリスまで見学しに行き、その思いを強くしました。しかし、同様のものを日本につくるには、乗り越えなくてはならない壁が多かった。なので、まず先行して同様の考え方に基づいた「暮らしの保健室」をつくったのです。両者に共通しているのは、予約がいらないこと、無料であること、内容に応じて専門職が対応すること、の3点に集約できます。

その後も、がん患者とその周囲の人のための居場所が必要だという思いはずっと持っていました。そんなとき、2014年に、日本テレビの記者であった鈴木美穂さんに出会ったのです。彼女は24歳のときに乳がんがんと診断され、休職しながら治療をしていた当事者で、彼女もまた、日本にマギーズセンターをつくりたいと願う1人でした。マスコミ業界ならではの人脈や行動力を持つ彼女と、訪問看護の経験や看護師としての専門性を持つ私が出会ったことで、急速に話が進み、2016年に「マギーズ東京」をオープンさせることができたのです。

—どのような方が「マギーズ東京」を利用するのですか？

がんと診断されると、本人も周囲も「死」をイメージし、絶望してしまうことが多いのですが、実際には、今日の全がんにおける10年生存率は58%で、乳がん、前立腺がんにおいては90%を超えます。しかし、これは、裏を返せば、「がんと共に生きる時間が長くなった」ともいえるわけで、再発や転移の不安や恐れを抱きながら生きる人が増えたということでもあるのです。実際、開設してから今日までの2年半の間に約15,000人の方がマギーズに足を運んでいます。

がんに伴う悩みは、他の病よりも悩みの幅が広く深いと思います。例えば、治療に専念するために会社を辞めた人は、治療を終えて再就職する際に、がん治療をしていたことを告げると不利になるのではないかと悩みます。3割負担とはいえ長期にわたる治療でかさむ医療費の問題や、婚約中がんと診断されたことで結婚話が白紙になってしまった女性もいらっしゃいました。マギーズセンターに持ち込まれる相談は、がんの相談ではあるのですが、いわば一種の人生相談です。

※2 がん治療中には、自分を取り戻せる空間とサポートが必要という考えに基づいて作られた、“誰でもいつでも立ち寄れる第二の我が家”としてのケア施設。乳がん患者であったマギー・K・ジェンクス(Maggie K Jencks)が提唱。1996年英国エジンバラに最初のセンターが作られ、現在(2019年4月)世界24か所に設置されている。自然光を採り入れることや、オープンキッチンを備えることなど、いくつかの建築要件があり、主に寄付によって運営されている。



マギーズのスタッフは、日々、そうした相談に親身に耳を傾け、気持ちや情報の整理を一緒にに行い、その人がその人らしく再び前を向いて歩きだすための手立てを一緒に考えています。

日本人の2人に1人ががんになる時代です。自分や身近な誰かが、がんと診断されたとき、一人で抱えこまずに、マギーズのドアを開けてください。医療機関では相談しにくかったお話も、ここでは気軽に相談していただくことができます。木造平屋建てのゆったりとした空間にはキッチンやダイニング、リビングもあり、大きな窓からは陽光が差し込み、テラスの先に緑の庭が広がります。安心と安全を確保しつつ、豊洲は近隣にがん専門病院が立地する、いわば病院と自宅の中間にある場所。ちょっと立ち寄って、少し休んで、少し元気になって、また歩き出す。そんな「マギーズ東京」という場所があることを覚えておいていただけるとうれしいですね。

インタビュー／坂井新二(東京都人権啓発センター 専門員)
編集／那須 桂 撮影(表紙・2～4ページ)／細谷 聡

●秋山正子(あきやま・まさこ)



1950年、秋田県生まれ。聖路加看護大学卒。助産師、看護教員としての勤務を経験。実姉の在宅療養を機に、訪問看護の重要性に気づき、訪問看護の道へ。認定NPO法人マギーズ東京共同代表理事およびマギーズ東京センター長、(株)ケアーズ・白十字訪問看護ステーション代表取締役所長、NPO法人白十字在宅ボランティアの会理事長、東京女子医科大学非常勤講師などを兼務。著書に『つながる・ささえる・つくりだす 在宅現場の地域包括ケア』(医学書院)などがある。2019年、第47回フローレンス・ナイチンゲール記章受章。

WEBサイト <https://maggiestokyo.org>



@maggiestokyo

一本の映画と出会う

優れたドキュメンタリー映画を観る会

飯田光代さんは、およそ20年にわたってミニシアターと呼ばれる小さな映画館を中心に、ドキュメンタリー映画の上映会を主宰してきました。一人の「主婦」が始めた映画の上映運動と、そのきっかけとなった作品を紹介します。

飯田さんが出会った映画は伊勢真一監督の『奈緒ちゃん』（1995年公開）。知的障害とてんかんを併せ持つ、監督の姪の奈緒ちゃんとその家族を長年にわたって撮影してきたドキュメンタリー作品です。ちょうどその頃、次男・



『奈緒ちゃん』 ©いせフィルム

悠史さんに知的障害があることがわかり、将来への不安を抱えていた飯田さんに、写真家で映画監督の本橋成一さんが薦めてくれたのだそうです。「奈緒ちゃんのお母さんがすばらしい。ぜひ見て」と。

映画に感動した飯田さんは、やがてその気持ちを周りの人たちと共有したいと思うようになりました。「障害のある次男は、長男や長女と同じ小学校の特別支援学級に通っていました。しかし、普通学級との交流がなく、残念に思っていたんです。障害者のことをもっと知ってもらいたかった」（飯田さん）。

こうして1997年、世田谷区の小学校で普通学級と特別支援学級の保護者と児童が、合同で『奈緒ちゃん』を鑑賞する会が実現しました。上映は好評で、飯田さんはそのときの手応えを次のように語ります。「鑑賞後たくさんの保護者から、とくに普通学級の方から、『何か手伝いたい』との言葉をいただきました」。



飯田光代さん

やがて特別支援学級の児童や家庭を支援するボランティアグループができ、登下校時の送迎や外遊びの見守りなどのほか、普通学級と特別支援学級の保護者の交流会などを定期的に開催。支援の輪は地域の商店街にも広がりました。小学校での映画鑑賞会は翌年2回目を実施。飯田さんはこのような鑑賞会を今後も継続したいと考えるようになりました。

かねてからよく訪れていたミニシアター「下高井戸シネマ」（東京都世田谷区）の支配人は、飯田さんの提案を受け入れてくれました。「タイミングといろいろな幸運が重なった結果」（飯田さん）同館

を拠点として1999年に「優れたドキュメンタリー映画を観る会」が立ち上がりました。その後毎年春に1週間ほどの映画祭を開催してきました。これまでに、およそ200本を越える作品が上映され、多くの方が鑑賞に訪れました。下高井戸シネマでの開催は、昨春いったん終了し、今年からは公共施設などでの上映会にシフト。次回は原点に返って、伊勢真一監督の作品を上映する予定です。

一方で、上映会だけでは飽き足らず、飯田さんは映画の配給会社を立ち上げました（2014年、ピカフィルム設立）。これまでに『サクロモンテの丘』『福島は語る』など4本の作品を公開。かつて映画と出会った一人の「主婦」は、いまや個性的な映画配給の担い手として活躍しています。

これまでの歩みを振り返って、飯田さんは次のように語ります。「映画を通じて、さまざまな課題を抱える人の存在を知り、自分との共通点を見つけて理解を深めることができました。ドキュメンタリー映画の素晴らしさは、いい意味で自分の価値観が変わり、視野が広がることです」。人権や社会について考えるとき、私たちはつい身構えていないでしょうか。もっと気軽に、例えば映画を見ながら、面白かった映画について誰かと話しながら、新しい価値観との出会いを重ねていく。そんな中に、人権や社会の学びの糸口があるのかもしれません。

インタビュー／坂井 新二（東京都人権啓発センター専門員）、編集／小松 亜子

もっと知りたい！

作品情報『奈緒ちゃん』（98分／1995年）演出：伊勢真一

知的障害とてんかんを併せ持つ奈緒ちゃんの、8歳から成人までの12年を追ったドキュメンタリー。障害がある子供と家族の日常を静かに見つめ続ける映画は、一つの家族を記録したアルバムさながら、「幸せ」について問いかける。

《毎日映画コンクール記録映画賞グランプリ》
《'95年度キネマ旬報文化映画ベストテン2位》等

<取材先情報> ・ピカフィルム <https://www.facebook.com/picafilm/>



優れたドキュメンタリー映画を観る会チラシ（2018年）

3つの事例で学ぶ、 人権と映画

映画には、記録（アーカイブ）や宣伝（プロパガンダ）、娯楽（エンタテインメント）の機能とともに、教育的な側面があります。啓発と映画というのは、じつは相性がよく、人権について深く掘り下げたものや、人権問題を学べる作品も数多くあります。今回の特集では、映画を通じて人権を学ぶためのアプローチを、3つの事例に即して考えてみます。

作品から学ぶ、マイノリティの権利と連帯 『ハーヴェイ・ミルク』

1970年代の米国サンフランシスコで、ゲイであることを公言（カミングアウト）して政治活動を行い、市政執行委員に当選したハーヴェイ・ミルクの活動と暗殺を記録したドキュメンタリー映画です。70年代のサンフランシスコはゲイ解放運動が大きな盛り上がりを見せていた時期で、各地から多くの当事者が集まり、とりわけハーヴェイ・ミルクが活動拠点を置いていたカストロ通りは、アメリカ屈指のゲイコミュニティが成立していました。ミルクはそこで政治活動を始め、多くのマイノリティから支持を集めました。そしてゲイを公言している人物としては初めて、市政執行委員という公職に就任したのです。

映画はその冒頭で、サンフランシスコ市長とハーヴェイ・ミルクが、同僚の市政執行委員D・ホワイトによって市庁舎内で射殺されたと発表されるシーンから始まっています。そのことから分かりますとおり、ミルクらの活動は一方では強い批判にさらされ、さらにゲイに対する根強い偏見や差別の中で反対派との政治的な争いを強いられたものだったのです。選挙によって公職に就いてから、わずか一年足らずでの暗殺でした。

映画の中でミルクはインタビューに答えて、自らが公職に就いた意義を次のように話します。「信じられない（インクレディブル！）特権階級…白人や権力者、ノン・ゲイ、大金持ちも私を無視できない。すごい立場ですよ」（字幕より）。また彼の支持者であり協力者である労働組合の幹部は、「彼は立場をはっきりさせていた。少数派としてのゲイのために、そして他の少数派のために」と評価しています。ミルクらの活動は、マイノリティが、その権利獲得のために他のマイ

ノリティ、例えば性的少数者、障害者、移民などさまざまな人々と連帯することが可能であり、大切であることを教えてくれます。

この映画を日本で公開・配給した中野理恵さん（株式会社パンドラ）

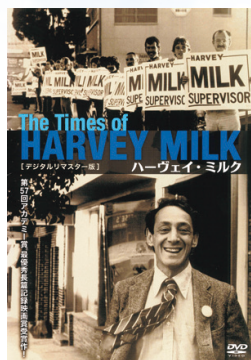
は、作品を「人間の尊厳を描いた映画」として位置づけます。そして「その存在が見えないものであるように扱われていた人々、すなわちマイノリティは、まずは声をあげ、その存在を主張するところから始めなければならなかったのです。公開にあたって、これは民主主義のお手本のような映画だという評価をいただきました」（中野さん）と語ります。

1988年9月に日本で初公開されてからすでに30年以上が経過したこの作品は、ドキュメンタリー映画史上にその足跡を残す作品として評価されるとともに、今でも各地で上映会が企画されているロングセラーであり、そのこと自体が今もって性的少数者への社会的偏見がなくなっておらず、その理解促進についての啓発が必要であり続けていることを証明するものとなっているのです。

「31年前に試写を見てもらうために呼びかけたメディアの人たちの多くは、当初は偏見を含んだ否定的な反応を示しました。中には「オカマの猟奇殺人」（！）とまで表現した方もいたくらいです。しかし試写の後には、これは多くの人が観るべき作品だと一転して評価してくれました」（中野さん）。はからずもこの映画が、人権について学ぶための優れた素材であることを示していると言えるでしょう。

自分が性的少数者等であるという
ことを表明する「カミングア
ウト（coming out）」がこの様な
表現になったのはなぜ？

答えは右ページ下に
あります。



『ハーヴェイ・ミルク』DVD ©パンドラ
原題 The Times of Harvey Milk
1984年アメリカ

映画祭に参加してみる。

ワンズ・アイズ映画祭vol.1「ともに生きぬく」

4月のある晴れた日曜日の朝、JR中央線の武蔵小金井駅で下車し、南口駅前にある小金井市宮地楽器ホールへ向かいました。目的は、ここで行われる映画祭に参加すること。「ワンズ・アイズ映画祭」は今回初めて開催された、できたての映画祭です。「ともに生きぬく」をテーマに4本の作品が上映されました。

上映されたのは、大西暢夫監督の「家族の軌跡～3.11の記憶から～」(2016年)のほか、『被ばく牛と生きる』(松原保監督・2017年)『願いと揺らぎ』(我妻和樹監督・2017年)そして塚本晋也監督の『KOTO OKO』(2011年)というラインナップで、中心となっていたのは東日本大震災後の様々な困難な状況の中で、家族、地域、生きものたちと、ともに生き抜こうとする人々を描いた複数の作品でした。

大切な人、生活や働く場等を失うなど、被災者は大きな被害を受けます。回復のために必要なのは、避難生活における様々な配慮や、物質面および心理面での支援、そして回復にかかる時間です。しかし、一方で時間の経過により記憶の風化が生じやすく、ときに被災者は社会から取り残されたような感覚におちいることがあります。この映画祭で上映された作品の作り手たちは、それぞれのスタンスで被災者や被災地の記憶と共にあろうとする強い意思を持ち、各作品にはそうした思いが込められていました。

実行委員の一人、映画監督の^{はなぶさ}瀬戸あやさんは次のように語ります。

「被災した方たちにとって、この8年がどのような月日だったのかは、到底伺い知ることはできません。また、カメラの前で恐怖や喪失、混乱の記憶を語ってもらうことは、語る方も、聞く方も、どれだけの痛みを伴ったかと思います。それでも今回上映した作品の製作者の方々にとって、これは自分たちがなくてはいけないこと、という止むに止まれぬ思いがあったのだと思います」。

参加した方からは「単独で観るより、それぞれの作品が自分の中で有機的にかからって、より開かれた視野でのちや生きることにについて考えるヒントをもらえました」という感想が寄せられています。ワンズ・アイズ (One's Eyes)、すなわち観客が自らの眼で映画と向き合えるような、上映の場を目指した取り組みは、ひとまず成功したと言えるでしょう。

ところで、小金井市には現在常設の映画館がなく、

市民有志による「小金井に映画館をつくろうプロジェクト」が以前から活動していて、今回の映画祭はその一環として行われたものだそうです。地域で暮らし、地域を愛する人々によって企画され、実現したこの小さな映画祭が、次回以降どのように発展していくのか。今後の展開が注目されます。



©ワンズ・アイズ映画祭実行委員会

映像ライブラリーを活用する

多くの公共図書館は視聴覚資料として映画や映像作品を備えています。また博物館や美術館等の文化施設には、付随する機能として映像ライブラリーなどを設けているところもあり、無料で映画作品を視聴できる施設というのは、意外に数多く存在します。さらに、映画や放送番組を専門的に収集し、公開している施設もあって、それらは利用料がかかる場合もありますが、活用が可能です。

そうした中、人権のジャンルに特化した映像ライブラリーとして、東京都人権プラザ(港区芝)の図書資料室をご紹介します。図書資料室にはビデオライブラリーが置かれ、700タイトルの啓発ビデオやDVDなどを備え、視聴と貸し出しを行っています。施設内には視聴のための専用のコーナーが設けられていて、配架された棚から自分で作品をピックアップして、視聴することができます。ちなみに、この特集記事で取り上げた『ハーヴェイ・ミルク』も、5頁のコラム記事で紹介されている『奈緒ちゃん』も、このライブラリーで観ることができます。

貸し出しを受けることができるのは、東京都内に居住、通勤・通学されている方。DVD等の貸出点数は1人5点までで、貸出期間は1週間以内です。

インタビュー・編集／坂井 新二(東京都人権啓発センター専門員)



人権プラザからのメッセージ

どうぞお気軽にお立ち寄りいただいて、さまざまな映画作品を楽しみながら、人権について学びかけにしてみてください。また人権学習や研修のための素材をお探しの場合は、図書資料室のカウンターへご相談ください。最適の作品を選ぶためのお手伝いをいたします。みなさまのご来場を心よりお待ちしております。



東京都人権プラザ企画展

ハンセン病と人権

儀間比呂志 絵本『ソルとタケシ』原画展

沖縄出身の版画家・儀間比呂志が沖縄・宮古島を舞台にハンセン病を描いた版画絵本『ソルとタケシ』の原画展を開催します。本展を通して、隔離政策とそれがもたらした根深い偏見・差別をどうしたらなくすることができるのか、考えてみたいと思います。

展示

- 会期 2019年8月17日(土)～11月30日(土)
休館日：日曜日(祝日は開館)
- 時間 9:30～17:30
- 会場 東京都人権プラザ1階
企画展示室
港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階
- 主催 東京都人権プラザ
関連イベントについては、お問い合わせください
- お問い合わせ 東京都人権プラザ
TEL 03-6722-0123 FAX 03-6722-0084



人権 TODAY

人権をめぐるホットな話題をお伝えします。

TBSラジオ
FM90.5 + AM95.4

(公財) 東京都人権啓発センターでは、人権問題をテーマに、リスナーにわかりやすく身近な話題を取り上げる人権啓発番組を提供しています。

ラジオ

- 番組名 人権TODAY(トゥデイ)
「蓮見孝之 まとめて!土曜日」内のコーナーです。
- 放送局 TBSラジオ FM90.5MHz / AM95.4kHz
- 放送日時 毎週土曜日 朝8時20分頃から5分間
- 出演者 蓮見孝之さん、北村まあさん

最近の放送内容から

2019年7月6日(土) 百聞は一触にしかず!「ふれる博物館」

2019年7月13日(土) 認知症を疑似体験「VR認知症」

放送ログはこちら

<https://www.tbsradio.jp/tag/人権today/>

人権問題都民講座

私たち抜きに私たちのことを決めないで

—障害者権利条約が目指す社会とは—

障害者差別解消法施行から3年が過ぎ、昨年東京都でも差別解消の推進に関する条例が施行されました。障害者への合理的配慮について、世の中の理解はどのくらい進んだのでしょうか。いま私たちにできることを考えます。

講演会

- 日時 2019年9月25日(水) 18:30～20:30
- 会場 東京都人権プラザ セミナールーム
港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階
- 講師 藤井克徳 きょうざれん専務理事
- 定員 80名(無料・事前申込制・応募多数の場合は抽選)
- 申込締切 2019年9月17日(火)
- 情報保障・託児保育あり(詳しくはお問い合わせください)
- お申込み・お問い合わせ
東京都人権プラザ TEL 03-6722-0123 FAX 03-6722-0084

「心と体を傷つけられて亡くなった
天国の子供たちのメッセージ」展のお知らせ

東京都人権プラザでは、特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクトのご協力により、今年もいじめ等により心と体を傷つけられて亡くなった子供たちのメッセージ展を、夏休みが終わるタイミングに合わせて開催します。



展示

- 会期 2019年8月21日(水)～8月31日(土) 日曜休館
- 時間 9:30～17:30 入場無料
- 会場 東京都人権プラザ1階 ロビーギャラリー
港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 1階
- トーク 8月21日(水) 10:00～
尾木直樹さん(教育評論家)ほか
8月24日(土) 14:00～
スマイリーキクチさん(タレント)ほか
- 定員 各回80名(事前申込不要、当日先着順)
- お問い合わせ
東京都人権プラザ TEL 03-6722-0123 FAX 03-6722-0084

(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から賛助会員制度を設けております。趣旨にご賛同いただき、ご加入下さるようご案内申し上げます。

個人
賛助会員

一口 2,000円

団体
賛助会員

一口 30,000円

● お問い合わせ

(公財)東京都人権啓発センター
総務課

TEL 03-6722-0082

※ 団体の
皆様の
会員の
の

- | | | | | | |
|-----------------|---------------|--------------|-------------|------------|-----------|
| (公財)東京都中小企業振興公社 | 東京都下水道サービス(株) | (株)東京国際フォーラム | 東京交通サービス(株) | (公財)東京観光財団 | 東京食肉市場(株) |
| (株)首都圏環境美化センター | (一財)東京都営交通協会の | 東京臨海高速鉄道(株) | 東京都住宅供給公社 | (公財)東京税務協会 | NPO法人TEOS |
| (一財)東京都人材支援事業団 | (一社)東京都信用組合協会 | (公財)東京都環境公社 | 東京都職員信用組合 | (公大)首都大学東京 | (株)日本アクセス |
| (公財)東京都歴史文化財団 | 東京人権啓発企業連絡会 | (株)東京エイドセンター | 東京都商工会連合会 | (一財)東京都弘済会 | 東京港埠頭(株) |
| (株)ミライト・テクノロジー | (公財)東京都学校給食会 | (公財)東京しごと財団 | 東京臨海熱供給(株) | 自治労東京都本部 | (株)ゆりかもめ |
| 東京都中小企業団体中央会 | (一社)東京環境保全協会 | 東京水道サービス(株) | (株)東京ビッグサイト | (株)東京交通会館 | (有)関東紙業 |

●編集後記(83号予告)

発行が大幅に遅れ、関係者の皆様には多大なご迷惑をお掛けしました。心よりお詫び申し上げます。次号Vol.83では、「絶望名言」の頭木弘樹さんへのインタビューや、海外の車いす利用者に東京の観光スポットを紹介しているウェブサイト Accessible Japan のご紹介などを掲載する予定です。どうぞお楽しみに。

TOKYO人権 Vol.82 2019年夏号
2019年7月31日発行(年4回発行)

- 制作・印刷/株式会社トライ
- 発行/公益財団法人 東京都人権啓発センター
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 2階
TEL 03-6722-0085 FAX 03-6722-0084
<https://www.tokyo-jinken.or.jp/>